大正から昭和30年代　吉野地区のハッカ栽培

『吉野　50年の歩み』掲載・抜粋

（略）農業

草分け当時（注：大正４～５年）は、巨樹うっそうとして昼間暗く、熊笹の密生した隈川の流れに沿って合掌小屋を建てて笹や茅を屋根にふき、住居とし、朝は星をいただきタベに月影を踏んでもっぱら開墾に力を注いだ。

しかし土地は案外肥沃であったので、肥料などはまったく要せずして除草のみすれば病虫害の予防などは考えず、新墾地とはいえど良く実り、収穫することができた。

当時は土地を開墾するということが主であったため、冬は1メートル以上の積雪の中で樹木を伐採し、春の融雪を待って下草とともに焼き払い、切り株の間を鍬で耕し、イナキビ、豆などを蒔き付け、漸次耕地面積を拡大して今日（注：昭和41年）に至っている。

今、当時からの状況を回顧するに、大正６年、熊坂寅治氏が初めて農耕馬を購入、畜力によるプラオ、ハローによる作条などを入れ、耕地に使用できるようになり、逐次、部落間にも使用する者が多くなった。

なお開墾と同時に北見特産の薄荷が作付けされ、栽培に力が入れられてきたが、蒸溜施設がなく、日吉まで馬の背に乗せて運び、蒸溜していた。

大正８年、耕地面積が相当拡大されてきたのでようやく蒸溜工場の建設が必要との声が高まり現在地に部落民共同出資による工場が建設された。草ぶき15坪の掘っ立て小屋であった。これが薄荷蒸留工場の始まりである。

やがて薄荷の栽培も漸次に拡大されてもっぱら薄荷ばかり耕作する専門的農家ばかりという状態になって、昭和10年前後は年間生産７千組を超え、工場数も20あまりになり、支庁管内１、２を生産するほど隈川の薄荷は有名になった。

毎年10月、11月ともなれば一斉に蒸溜が行われて薄荷の香りが秋風に乗って吉野の野に山にその匂いが漂い、本当に薄荷の全盛を極めた。

しかし昭和15年頃から長年連作した関係か生育が極めて悪くなり減少の一途をたどり、昭和20年頃は２工場のみ操業というありさまで、部落中の蒸溜もこの２工場で事足りる状態となってきた。

しかしその後、昭和30年頃から再び薄荷王国を目指すべく薄荷耕作者も増して現在は７工場が操業、約800組が生産されるまでになった。しかし、これとて最盛期からみると10分の１に過ぎぬほどである。（略）

（略）薄荷

薄荷は大正５年当時、開拓と同時に赤丸の種根１反あまりを植え付け、逐次増加。昭和10年頃がピークで相当量をあげ、世に言う薄荷成金というバロメーターとして隆昌を得ていたが、昭和17年頃から昭和22年の間は戦時の食糧増産に切り替えられたため、ほとんど種取り程度になり、往時の隆昌の様相はなくなった。

しかし昭和30年頃からまた脚光を浴び、再び栽培に力を入れるようになる。近年は新種も次々と出て、万葉種から大葉種、さらには芳葉種に替わり増収が予想されている。現在の耕作面積約７町あまりである。薄荷蒸留工場７ヶ所。